学問・学科区分の推移と「教養」の変質

人文学部　深　澤　助　雄

On the Divisions of Sciences and Disciplines and the Accompanying Changes of the Concept of Cultivation

Sukeo FUKASAWA (Faculty of Humanities)

In tandem with steady progress made in the research of natural sciences after the 19th century, several attempts to show the characteristic existence of the humanities as their counterparts were repeatedly made. Among them are two typical attempts in Germany, one of which is a dichotomy of the research field into Natur-und Geisteswissenschaften, which was followed by another one into natural sciences and cultural sciences. A study into the social and institutional background in which they appeared sequentially, and also the methodology and epistemology to which these two attempts resorted to secure the studies of the humanities reveals the process of the change of the concept of cultivation including an ideal of humanity, understanding of personality development, and etc.… It also makes clear how 'Humboldtian Ideal' lost its substantial value. In this article I will try to bring light some of the reasons for the decline of the ideal of cultivation with a help of D.Riesman's analysis. It is also a purpose of this article to review research work and education in 'the modern world-system' through an inquiry into the process in which sciences in Germany in the 19th century were reorganized into 20th century American sciences.

Key words: Cultivation, Geisteswissenschaft, Cultural science, Other-directed types, Modern world-system

内　容　目　次

はじめに

一．文学部の学科区分と「陶冶」の理念

二．自然科学対精神科学・文化科学

三．「精神科学」の抬頭と「陶冶」の衰退

四．「文化科学」と研究至上主義のエートス

五．「内部指向型」から「他人指向型」へ

小結　－「近代世界システム」と学問区分－

はじめに

C．P．スノーが「二つの文化」について語ったのは、今を去る四十年ほど前のことであったが、今日スノー流の区分は意義をもつであろうか。[1] スノーが目にしていたのは、科学者と人文主義者は同じく知性と文化にかかわりをもつ人種でありながら、実は相互に反撥し、全く別個の世界に棲んでいるという事態であった。両者は、我々が謂う理科系と文科系の区別にほぼあてはまるものと見てよいが、ここ数十年の間に、理系、文系という区分けと、スノーが指摘してみせたような両者の排他的関係、或いは相互の無理解・無関心といった状況は、解消の方向に進んだであろうか。それともこの関係は、一層不毛な独善主義に向って進行しつつあるのだろうか。

卒爾に見ると、文系、理系の違いは、大学入試制度のゆがみに過剰に反応した高校教育に於いて、双方どちらかの志望を早期に決定するよう迫られるといった状況下で加速的に進行しているように思われる。又、研究者養成のシステムに於いても、スペシャリストとしての訓練が早まるなか、文理の隔壁は次第に高まり、事態はさらに對立の様相を深刻化しているように見えてくる。だが果してこういった見方だけで、事態が十分にとらえられているだろうか。というのも、現在進行中の研究活動の実態をよく見てみると、理系、文系の学問研究のスタイルの違いは、以前よりはだいぶうすれてきているとみられる一面もあるからである。実験・調査・統計という手法は、以前は自然科学系の専売特許とされたものであったが、これらの手法は、かつて文化科学といわれていた領域でも大幅に採用するところとなり、今や所謂文科系でも、実証主義、経験主義の制覇は、隠れようもない事実となっている。とりわけ、一九六〇年代から、ことあるごとに唱導された学際的研究は、文科と理科の境界領域を席捲し、そこでの交流もあって共通にとられる手法は、著しく理系のそれになびいてきている。しかもことはこれだけにとどまらない。手法が似通ってくると、当然のことながら、研究業績の評価の仕方も類似のものになり、実証的経験科学の評価システムが、文系の領域でもひろまっている。そして何よりも一つのパラダイムが定着してノーマル・サイエンスとして走り始めると、研究活動は自己増殖過程に入るが、文系の多くの分野に於いてもこの傾向は顕著である。しかし、これは別の見方からすれば、成果のあげ易い研究分野へと、文科系の学者をも大きく動かしたということであり、やや皮肉な観点に立つと、学際研究に於ける相互交流は理系的手法の勝利に終り、この間、文系の研究者は、伝来の固有の方法——このなかには卓越せる意味での専門家が駆使してきた高度なテクニックがある——を次第に疎んじて行くプロセスに組みこまれざるを得なかったと云えようか。こうしたなか、文系も変質につぐ変質をとげ、今や理科と文科の違いは、実証化の段階における先進と後進の差異でしかないといった考えさえ見られるようになってきている。

以上は研究レベルにうかがわれる実証主義的、経験主義的「方法の制覇」を一面的に誇張してみたものであるが、この傾向がさらに進むならば、スノーの憂いは、いささかグロテスクなかたちではあれ、とりこし苦労に終わったかも知れない。というのは、「知識社会の社会構造のなかでは、機能的合理性とテクノクラティックな様態の活動に参与している技術系知識階層technical intelligentsiaとますます默示的に、快楽主義的に、そして虚無的になってきた人文系知識人literary intellectualsとの間で、亀裂が深く広がって」[2]いると指摘されてから、二十年余を経た現在、この亀裂の一方の当事者と目された人文系知識人は、もはやその姿をみかけることさえ、稀になりつつあるからである。

一世を風靡したD．ベルの「脱工業化社会の到来」の一節で冷笑的に言及された人文系知識人、だが今やそれさえも拂底しつつある現実、この趨勢は、何に起因したのであろうか。こうした事態の推移は、我々に何を語りかけているのだろうか。

ヨーロッパ近代に於いてヒューマニズム、即ち人文主義は、その教育上の役割に於いて特記さるべき存在であったが、人文主義者（ヒューマニスト）の末裔たる人文系知識人が、次第に姿を消して行ったということは、教育の場に於いても彼らは不用とされつつあったということではなかろうか。不用というのが少しく酷な表現であるとされるなら、人文主義者がその役割をになってきた教育現場が、彼らの抱くヒューマニズムの理想とは齟齬をきたしたと云いかえてもよい。いずれにせよ、時代と人文主義のかかわりにミス・マッチが生じていることはたしかである。

教育、人間形成、人格の陶冶、教養といった言葉にもりこまれ、ときにはこれらの言葉をきらりと輝かせることもあった意義内容の多くは、ヒューマニズムの理想にささえられており、これらの理想を繰り返し語りついできたのが、ヒューマニティズ、つまり人文学であった。今それが、教育の場に於いて肩身を狭くしているということは、ヒューマニズムの内容がもはや時代遅れのものになったということなのか、ヒューマニストがリアリストやプラグマティスト、テクノクラートに伍してゆくだけの器量がなくなったということなのか、或いはそもそもヒューマニズムそれ自体は、既

に歴史的使命を完了して、今や完全に過去の遺物でしかなくなったということなのか……。この事態を見定めることなくしては、つぎの段階に進むことはできない。

以下、ヒューマニズム（人文主義)、ヒューマニティズ（人文学）と大学教育とのかかわりを通観し、ヒューマニズムがここ二世紀間に辿った消長をあとづけてみよう。消えつつあるヒューマニズムは、古いヒューマニズムであり、新しいかたちでのヒューマニズムの再構築が模索されるべきなのかどうか、或いは仮りに古い皮袋に新しい酒をもることができないとすれば、ヒューマニズムにかわりうる別個の理念を掲げるべきなのかどうか。問いは困難なものであるが、いささか卑見を展開してみたい。

註　1．C．P．スノー「二つの文化と科学革命」（邦訳、みすず書房）所収の「二つの文化」（1956年）を参照。なおスノーについては、本誌所載の井山弘幸「二つの文化と二つの教育に関する断章」の３節以下の論及をも参照されたい。

2．D．ベル「脱工業化社会の到来」（1973年）第三章第三節（内田・村上他訳・ダイヤモンド社、1975年　P.288）による。なお、以下、引用文献は、極力入手し易い邦訳に依り、該当の個所を掲げるが、引用文はテキストに即して変更した個所もあるので、必ずしも合致しないところもある。

一．文学部の学科区分と「陶冶」の理念

中世ヨーロッパの学芸学部の伝統をひく文学部（十九世紀ドイツの名称では「哲学部」という。ただし伝統的大学に於いては、数学、物理学、化学、生物学等の自然科学領域をも含むので実情に即すれば「文理学部」にあたる）が所謂「哲・史・文」の三学科を主たる構成内容とすることは周知の通りである。ところで何故に文学部のディシプリンが、哲・史・文に三分されたのかということが、まず問われなければならないが、その理由は、十九世紀に於ける「学問の府（Center of Learning)」ドイツの学術体系は、一八一〇年開学のベルリン大学の建学の理念にもとづいて組成されたためであると云ってさしつかえないであろう。そこには、十八世紀フランスの啓蒙主義、或いはハレ大学がその代表例であるところのツンフト（＝ギルド）化した旧来型の大学の実用主義へのカウンター・カルチャーとして形成されつつあったきわめてドイツ的な学問観があった。それは前世紀初頭の巨大な思想潮流に棹さすものであるが、極く概括的に述べるならば、次の三つに収斂させうるであろう。つまりその一つは、カントからヘーゲルへと至る近世最大の思想潮流としてのドイツ観念論であり、次いで、ライプニッツからゲーテを経てランケに結実する歴史主義、そして最後に古典古代の文化へ今一度回帰しようとする新人文主義の気風である。この三つの思想が、文学部内の哲・史・文三学科の支柱となったことは見易い道理であろう。[1]

さて大学史の教科書をひもとくと、十九世紀ドイツの大学はきわめて特異な事例であったことが記されている。その特異さは、中世以来の四学部制のなかで下級学部であった哲学部が一挙に大学全体の中心学部として躍り出たということに象徴されている。そしてこの哲学部の優位のもと、これまたきわめて異例な理念がかかげられる。それが「研究と教育の統合」であり、「学問を通しての人格の陶冶」という考えであった。

「研究と教育の統合」、或いは「学問を通しての人格の陶冶」は、W.v.フンボルトが提唱したことから、世上名高い「フンボルト理念」として知られるものであるが、これらは、今日の我々にとっては、ほとんど死語同然の観念である。ところで、この種のモットーを耳にしたとき、聞こえてくる反応は、エリート養成の機関としてならばともかく、M. トローの所謂「大衆段階」の高等教育に於いては到底採り得ない考えであるという答えであろう。しかし、こうした反応は実はおかしなものである。というのも、「フンボルト理念」は、十九世紀の後半に於いて既に形骸化しつつあり、何も二十世紀の末期に於いて敢えて無効を宣する必要などはない筈だからである。にもかかわらず、今、このことを問題にしなければならないと思うのは、この夙うに葬り去られた筈の観念がなおも我々の議論の

なかにまぎれこむことがあるからである。それはどういうことか。

「人格の陶冶」という概念の内実が、ひどく空虚なものとなっていることは、誰も否むことができない。我々は「教養教育」について語り、教養とは何であるべきか、しばしば議論をするが、そのとき教養とは「専門」以外のものということであり、「専門」だけでは得られない何かである。ところでこれまで「（人格の）陶冶」と訳してきたものの原語はBildungであるが、このBildungは「教養」という語に訳される場合の方がはるかに多い。従って人格の陶冶であれ、人格形成であれ、これらはいずれも「教養」なのである。[2] 或いは「教養」と云うときには、常に頭のどこか片隅に「人格の陶冶」という観念がしみこんでいると云いかえてもよい。そしてことがこのようなものであるならば、フンボルト理念がなぜに夙くも十九世紀の末期には形骸化せざるを得なかったのかを問うことは、「教養」概念の推移を探る上で避けることのできない課題となろう。以下、このことを学問区分論の推移と重ねながら、あとづけてみることにしよう。

註　1．なお詳しくは、上山安敏「ウェーバーと知識社会」第一章ドイツ・アカデミズム（「ウェーバーとその社会」ミネルヴァ書房1978年　3頁）を参照のこと。

2．ドイツの大学では教養科目がないと言われるが、「学問を通しての人格の陶冶」が前提である以上、学生が自己の研究課題を追求することが、そのまま「陶冶」につながっているわけであり、「教養科目」乃至は「一般教育科目」を制度的に別立てする必要はなかったと云えよう。

二．自然科学対精神科学・文化科学

前節に述べた「研究と教育の統合」は、ドイツ的に解釈された「教授の自由」と「学習の自由」という二つの自由の理念と密接不可分の関係にある。とりわけ「教授の自由」は、教授内容の自由として勃興期ドイツ科学の有力な理念的支柱ともなった。というのは、象牙の塔としての大学のなかでも特に哲学部は、プロフェッショナルの養成をめざす所謂上級三学部（牧師・聖職者養成のための神学部、行政官僚養成の法学部、それに医学部、後の二者は、中世以来「黄金の実る学問scientiae lucrativae」とも云われる）とは異なり、実用的な知の追求とは別の、「特定の目的に仕えることのない純粋なる知の探求」[1] をめざしたが、実用を離れた純粋知の探求は、講壇に於ける「教授（内容）の自由」と結びつくとき、私講師層の学問的野心を喚びさますことになり、新たな学問領域の開拓とその深化にとってきわめて好都合な誘因作用を果たすこともあったからである。

さらに又、「学問を通しての人格の陶冶」という教育面に於ける理想は、プロテスタント・ドイツの「内面性の自由」にもとづく人格の理念にそうかたちで教育の目標を人間の品性の向上にあてたものであるが、これは世俗化が進行する十九世紀を通じて独特な作用を果たし続けることになる。とりわけ、ギムナジウムに於ける古典語教育の重視と相俟って、この「陶冶の理想」の信奉者たちは、次第に社会的に隔離された「教養貴族層」とでもいうべき新たな階層を形成して行く。彼らは、一般大衆が拠るところのルター派の信仰とは一線を画し、「教養宗教Bildungsreligion」と今日名づけられているところの特異な宗派に組みこまれることによって、近代世界には稀有なドイツ固有の読書人階層を育てあげてゆく。この流れは、かつての我国の旧制高校の教養主義のはるかな淵源をなすものである。[2]（これがドイツ精神史に如何なる副作用を残しているかは、今日なお検討に価いするテーマである。）

以上、所謂「フンボルト理念」を摘要してみたが、この理念はしかしながら時の経過のうちに幾つかの重大な欠陥を露呈し始める。その第一は、「教授内容の自由」をささえとして進められた純粋知の探求が、世紀の後半に至って細分化、専門化の傾向を色濃くしてきたことである。これは近代化、つまり産業化が急速に進行するなか、哲学部のもう一つの主要部を構成する自然科学系の学問が大きな進歩を遂げるのにひきずられるかたちで進んで行く。そのような状況下にあらわれたのが、学問の区分についての議論である。それは産業化・機械化が高度化してゆくとともに、理科系

の学問がいよいよ高度に専門化するのを横目にみながら、危機感を覚えた文科系の学問の固有性を守りぬくために展開されたものであったが、ここに登場する学問区分論を見てみると、注目すべき事柄が浮き彫りにされてくる。

実用を直接の目的としない純粋なる知の領域のなかで、数学はけだしその尤なるものの一つにあげられるであろう。ところが自然科学の多くは、この数学を応用することによって自然認識の領域を拡大するとともに精密化して行き、しかもそこで獲得された知は、時の検証に耐える普遍性をもつ。しかるに人間と社会にかかわる事象には数学の適用は進まず、それにもともと哲史文の学問は、人間精神の所産として伝統的に独自の領域を形成するものと思われていたことから、学問は自然にかかわる研究と、それ以外の研究というかたちで区分されることになった。ここには、自然科学として明確に指定しうるものをまず擇り出し、次にこれには含まれないものに対しては「非自然科学」という消極的な規定を持ち出して、この非自然科学の独自性を根拠づけようとするねらいがみられるが、この区分の特徴は、学問研究の一方の側を、自然を対象とする領域として一括したことに伺われるように、対象領域区分に根ざした学問区分論に傾くという点にある。[3]

さて対象領域を「自然」と「非自然」に二分するとして、次に問題となるのは、この「非自然」を特徴的に区画することのできるキィ・ワードがあるかどうかということであるが、これに対しては、近世初頭以来の物と心の二元論が援用されることになる。そして自然科学の対象領域を物の世界とし、今一つの学問領域にあたるものは心的世界として、その中に人間の精神活動とそれの結果としての文化的歴史的所産をもともに含めようとするとき、自然科学から除外された非自然科学は「精神科学」として一括されたのである。学問の区分を対象領域に即して明確化するというこの方式は、だが、この対象区画のそれぞれにふさわしい固有の方法論を示そうとしたとき、一つの難問に遭遇することになる。それは、「着実に進歩する自然認識」に於いて物理学が果たしているような役割をになえる基礎学は何かと問うたことから始まる。

精神科学が心的世界を対象領域とし、歴史的文化的世界をも心的所産として包括しようとするならば、<物的世界－物理学>に類比した役割を期待されるのは心理学ということになろう。だが心理学は、果たして精神科学に於ける基礎学としての役割をにないうるものであろうか。或いは精神科学は心理学において成果をあげた手法を他の領域にも適用することによって開拓されるものであろうか。答えは残念ながら否定的なものであった。その理由は、心理学は十九世紀において既に、哲学の一分科というかつての隷属的状況を離脱していたが、心理学の独立はまさに自然科学的手法を採用することによって達成されつつあったからである。

確実な成果をあげてゆく心理学が、自然科学の手法そのものではなくとも、従来の文科系領域の方法とは著しく異なるかたちをととのえることによって発展したものであることは、「精神物理学」或いは「実験心理学」といった当時の呼称によってもある程度うかがい知ることができよう。精神物理学は、物理学者であったG．T．フェヒナーにより、実験心理学は生理学に出発したW．ヴントによって確立されたことが、這般の事情を何よりも雄弁に物語っている。ところで心理学がこのように親自然科学的手法を採り始めたとき、他の精神科学はこのことにどのように対応したかと云えば、心理学を精神科学の基礎とすることはもとより、心理学的手法の導入をも拒否するということであった。

以上が前世紀後半に起った学問二区分論に於いて生じた事態である。自然と精神というように対象区画をし、それぞれに下位区分としてこれまでのディシプリンを配当するところまでは有効に思われたこの区分は、それぞれの区分原理に即応した方法論的固有性、乃至は基礎学を探ろうとしてたちまちに暗礁に乗りあげたのである。だが、それはともかくとしてこの時以来、学問区分にあたって二大領域区分をとるスタイルは優勢になってゆく。

「自然科学対精神科学」という区分に生じた隘路を打開する努力は、その後も模索を続けることになるが、次にあらわれたのは新カント学派、特に西南ドイツ学派による二分論である。これは前記区分が逢着した特有の困難、即ち精神事象、特に人間の意識現象を扱う心理学は、対象領域区分からすれば精神科学であるの

に、方法論的には自然科学的手法に傾いているという事実になんらかのかたちで折合いをつける必要から生まれたものである。このことを解決するためにとられた視圏は、自然科学とは区別されたる学問群の対象領域を、「人為と人為的所産としての文化」に一括できるとみなすところにあり、この「（人為＝）文化事象」を解明する知識群を「文化科学」として概括することによって始められる。そしてこの学派に固有な「自然科学対文化科学」という区分はこの二大領域の各々に特有な方法をも呈示して、この二大学問群は方法論的に截然と区画されるとした点にその独自の意義が認められよう。彼らの術語によれば、学問は、「質料的類別原理（材料としての認識対象）」のみならず、「形相的類別原理（認識の形式、即ち方法的性格）」によっても明別されるのでなければならない。彼らは、このことを以下のように説明している。[4]

事象を概念的に把握するということは、「同質的連続と異質的不連続を見定めるところに行なわれる。」同質的連続を扱うのは、数学的手法であり、これによる操作手続きは、「一般化」をめざす。他方、これに対して、異質的不連続に重点をおくとき、ここには個別的事象が浮かびあがってくるが、この個別的事象をその特性に即してとらえるのが、「個性化」的手続きである。この両者は、法則を求めるための「一般化」と、かけがえのない個別の特性を記述する「個性化」として、方法論的には好個の対照をなす。そこでこの二つの手法を学問区分にもあてはめてみるならば、まず自然科学は、事象の生起に対面したとき、時・所の如何を問わず、それが一定の条件下では繰り返しあらわれる現象であることに注目する。換言すれば、規則的、普遍的レベルに於いて把握しようとする。他方、文化科学は、生起した事象を個別的時空に限定された、反復不可能な出来事としてとらえようとすることに特徴がある。かいつまんで云えば、事象の個別性・附帯的側面を捨象・抽象して共通性に着目すれば、事象はその普遍性の側面を呈示することになり、そこに法則が見えてくることになるが、特定の時間・場所に生起したという事実を一回限りのこと、個別的なこととして、この個別性に特有の価値を見出してこれを重視するとき、事象は個別的記述の対象となるであろう。かくして自然科学は前者の立場をとって、法則を定立することに、文化科学は後者に依拠して個性記述的であろうとすることにその本来のすがたが求められるべきである……云々。このようにして自然科学と文化科学は、その対象領域の違いもさることながら、これにもまして認識意義乃至は認識目的の相違により、画然と区別されることになる。この学派の代表者リッケルトは、「現実は、もし我々がそれを普遍的なものに着眼して考察するときは自然となり、特殊にして個別的なものに着眼して考察するときは歴史となる」[5] と高らかに宣言しているが、これは、或る程度首肯できることであろう。

以上、西南ドイツ学派の学問区分論を要約してみたが、この区分は、「自然科学対精神科学」という二分法よりもよほど理論的斉合性をもち、従ってかなりの支持者を見出し得た区分であった。しかしながら、今日ではおそらくこの区分法をもって学問論を展開するものはほとんどいないであろう。それはどうしてかと云えば、この区分の生れてきた経緯、或いはこの区分法の母胎となっている学問的土壌を考えてみれば理解できるように、この区分はドイツ歴史主義の伝統を濃厚にとどめた十九世紀的哲学部の常識にそうものでしかなかったからである。時代が二十世紀に突入すると、「学問の府」はドイツからアメリカに移り、ドイツ科学の成果は、あるものは受容せられてアメリカナイズされるとともに、あるものはその無効を宣告される。そして何よりも学問研究の国際化が、ドイツ科学、ヨーロッパ科学といったかつての学問を形成せしめた国民的特質を稀薄にしつつ、普遍化が進行しているからである。

ともあれ、精神科学、文化科学といったカテゴリーのもとに、文科系学問の意義づけをはかる試みは、今日もはやあまり意味をもたないが、ただ以上のようなかたちで学問区分がなされ、精神科学、文化科学とキィ・コンセプトが推移した経緯を照射すると、ドイツ内部に於いても学問の変質は順を追って進行していたことに気づかされる。そしてこれとともに、「学問研究を通しての人格の陶冶」という教育目標も大きな危機を迎えてゆくことが認められる。以下にかいつまんでこの事態を一瞥しておこう。

註　1．H．シェルスキー「大学の孤独と自由」1963（田中他訳　未来社　1970年）19,169頁による。

2．このことについては、F．K．リンガー「読書人の没落」1969（西村稔訳　名古屋大学出版会　1991年）、野田宣雄「教養市民層からナチズムへ」（名古屋大学出版会1988年）を参照のこと。

3．この部分以下の記述はW．ディルタイ「精神科学序説」1883（山本・上田訳　以文社1979　上・下二冊）の上巻第一部による。なお、「精神科学」という語は、そもそもはJ．S．ミルのmoral sciences（道徳科学）の訳語として作られたものであるが、この語が非自然科学を一括するものとしてW．ヴント．ヘルムホルツ等に用いられるに至った経緯、さらにはヴント流の精神科学とは別に、W．ディルタイが「精神科学」を基礎づけようとして提起した「記述心理学」の概念や解釈学的方法については、ここでは論述を控える。

4．この部分以下の記述は、W．ヴィンデルバント「歴史と自然科学」1893（篠田訳　岩波文庫　1929）及びH．リッケルト「文化科学と自然科学」1898（佐竹他訳　岩波文庫1939）による。

5．前記「文化科学と自然科学」104頁

三．「精神科学」の抬頭と「陶冶」の衰退

知の体系を、精神にかかわる領域と自然にかかわる領域といったかたちで二分する着想の最も身近な先蹤としては、世紀の前半に大きな影響を与えたヘーゲルがあげられるかも知れない。たしかに表面的には、精神科学・自然科学という区分は、ヘーゲルの哲学体系に於ける精神哲学、自然哲学という区分にそうもののように思われる。しかし、世紀の後半に学問がこの「精神と自然」という二大領域に区分されたことは、それ以前の学問体系を知る者にとっては、一種の地殻変動にも比せられることであった。というのは以下のような事態が、このことの深部には潜んでいるからである。

知識、或いは知慧を整理し、区画する場合にとられる仕方は、伝統的には二つのイメージにおきかえられてきた。その一つはF．ベーコン以来の「知の地球儀」と呼ばれているもので、未知の分野と既知の領野、或いは学問の様々な分野が、あたかも地球儀に描き出される大陸や海洋、島々のように位置づけられるとするものである。ここでは未知の領域は、文字通りに暗黒の大陸として思いうかべられる。これに対してもう一つの仕方は、知を樹木にたとえるケースであり、知は一本の木がそうであるように、根と幹と枝と葉から成り、たとえば万学の基礎としての形而上学は、木の根にあたるものとして表象される。この二つは、「知」についての人類のこれまでの考えを象徴的な仕方で明示しているものと云ってよい。つまり、知が「地球儀」として表象されるケースに於いては、あたかも大航海時代に冒険家たちが、危険な海に舟出して、それまでは未知であった海洋や大陸、島々を発見して行ったように、好奇心に駆られた研究者が未知の分野を次第に既知の領域にかえてゆくさまが髣髴させられる。これは経験科学の場合には実に的確な比喩となろう。他方、形而上学は木の根にあたり、自然科学は幹であるというようにして、根→幹→枝→葉という図柄を以て知を表象するのは、経験科学とは対照的な、云うなれば学問の演繹的性格に重点をおいたものと考えることもできるだろう。さらには、「知の地球儀」が、努力を重ねることによって絶えず増大し、蓄積されてゆく「知識」を説明するのにふさわしいとすれば、木の比喩は「知慧の木の実」のたとえのように文字通りに「知恵」の本質をとらえたものであると云いうるかも知れない。ともあれこうした事柄を念頭において頂いた上で本論に帰ろう。

さきに、「地殻の変動にも比せられる」と述べたのは、学問の領域を二分する發想は、知識の地球儀を東西、乃至は南北の両半球に分けるのに類似したことで

あり、全ての学問的ないとなみが、あたかも同一球面上の図柄にも似た経験知の領域のレベルに並置され、平準化されるような事態に立ち至ったことを指したものである。それまでの学問は多少なりとも「知慧の木」のイメージでとらえられ、従って学問的知識には一種の位階が想定されていたが、今やこの位階が崩れたことをはしなくも示しているのである。ともあれ、精神科学対自然科学という区分は、ヘーゲルに於いて—従って亦ベルリン大学の建学当初の理念に於いても—学問の冠冕をなすと考えられていた本来の哲学がかつて占めていた地位が、今や虚構に化してきていることを暴露したものであり、哲学が大学内部に於いて生存を望むならば、哲学史研究、論理学、倫理学、美学等の専門個別科学として、他の精神諸科学と並列同等のものとしてしか生きられないということを示すものであった。この時以来、哲学は、哲学史の個別研究として、或いは論理学、倫理学のような個別科学たることを余儀なくされてゆくが、このことは、哲学も又、細分化の運命にさらされることを意味するものであった。そしてこれはさらに云えば、「学問を通しての人格の陶冶」という「フンボルト理念」を支えていた統一的人格、乃至は人格の統合という理想をも危殆に瀕せしめるものであった。というのもここでの「学問」とは、哲学を根とし、幹とする「知恵の木」の枝であることによって「知恵の木の実」を約束されていたものであったからである。ともあれ、知の全体に通底するものとしての「哲学」という理念が意味をもち続けているかぎり、この知を志向するというかたちで人格の統合も理念的課題としては追求され得たが、哲学の崩壊が暗示されると同時に、統一へと志向する意思の基盤も掘り崩されることへとつながってゆく。[1] このことを具体的に気づかせてくれるものとしては以下のような事例があげられよう。

さきに人間の心を研究する心理学が、次第に自然科学的手法に接近してゆく傾向について言及しておいたが、心であれ、精神であれ、これらは、自由なる主体的人格の要(かなめ)をなすものとかつては考えられていた。一個の独立した人格の判断力と意思の自由がやどっている場が心であり、精神であった。しかるに意識現象が生理学に近似した手法で研究の俎上にのせられはじめたとき、心は精神疾患という病理的レベルに於いて、或いは動物の一種としてのヒトの反射行動のレベルで研究されこそすれ、もはや人格的統合の原点として問われることは決してなかった。これ以降、人格統合の原理としての心の探求は、次第に客観性をもたない単なる人生論にすぎぬものとして一蹴されるとともに、「人格の陶冶」は書生談義として葬り去られてゆく。

以上は十九世紀末期に於いて精神科学という学問領域が区画されたときに生じた教養の変質の一端である。しかも事態はこのことだけにはとどまらなかった。「文化科学」という画定も亦、一層の変質を誘因するものとなって行ったのである。次にこのことを見ておこう。

註　1．「統一へと志向する意志の基盤」について考える上で参考となる事例として、我国に於いて教養主義的人格理念が意味を持ち得たのは、ヨーロッパ先進国への同化が、国家目標たり得た時代の知識人—これの典型は「偉大なる暗闇」の一高教授岩元禎—や、マルクシズムが影響力をもっていた時代の学生の意識があげられよう。マルクシズムはグランド・デザインとして、知の全体を根幹において支えるものであると受けとめられたがゆえに、親マルクシズム的学生に於いては、教養志向が強かったと云えるのであるが、このことは「人格の統合」へと傾斜する心性を解明する上で、示唆的な事例である。

四．「文化科学」と研究至上主義のエートス

第二節に述べたように、文化科学は個性記述的学問としてその特性を顕揚されることになったが、このことはさきに引用した「現実は、……特殊にして個別的なるものに着眼して考察するときは歴史となる」というテーゼが端的に示しているように、文化科学は実は歴史科学となることによって始めてその本来的意義を全うすることができるということを含意している。というのも、個性的なるものは、歴史的事象の一回性に

こそ見出される筈であり、又、歴史的事象は、他とは異なる個性的なるものであることを確認されて人々の記憶に残るものとなるからである。（歴史をこのようにとらえることには、当然のことながら異論がある。ここでは、ただ新カント学派の見解を辿るにとどめる。）ところが、文化科学を歴史科学と等置する方向に重点が移ったとき、ここにも又一つの大きな問題が生じざるを得なかった。「文化事象＝歴史的事象」と受けとめられたとき、現実的実践的課題へ向けられるべき視線が、文化科学からドロップする傾向が生じてきたからである。

今日の社会科学者は、自己の研究が「文化科学」というカテゴリーに概括されることを拒否するであろう。その理由は、おそらく、「文化科学→歴史科学→過去の事象にのみ目をむける態度」という連想が、つきまとっているからである。文化科学は、西南ドイツ学派の元来の主張では、社会諸制度、社会集団、社会的行為等々の研究、経済現象、政治事象等に関する学問をも當然のこととしてその中に含むものとされていた。しかしこうした分野の研究も重点が移動して、次第に過去の歴史的事象のそれにかかわることが多くなるにつれて、結果的には、現実の社会、政治、経済等は、直接的な研究対象としてはとりこぼされて行くことになった。そして文化科学から、現実的、実践的課題へ向かう視線がとりさられたとき、あとに残されたのが狭義の人文科学であった。文化科学は、これ以降、狭く人文科学を指す概念に限定される傾向をおびてくる。しかもあろうことか、この人文科学は、西南ドイツ学派の潮流ともかかわりのあったM. ウェーバーの提唱する「没価値性の理論」を、自己の研究の正当化のために借用し、さらに云うならば、隠れ蓑ともすることによって、現実世界の動向と切り結ぶことを放棄していくことになるが、その代償として「何の役にもたたない学問」という世評だけが残された。今日、近・現代史にとりくむ人々は、外交史、政治史、経済史の分野に多いが、これらの分野は、社会科学としての国際関係論、政治学、経済学の一部門とみなされている。一方、古代史、中世史は、「没価値的な領域」として人文科学固有の分野であるといったレベルで受けとめられる傾向が強まっているが、こうした理解が広まった遠因は、文化科学を個性記述的歴史科学として基礎づけようとした企図にそもそもの端緒を探りあてるべきであろう。

次第に優勢に赴く自然科学に対抗して、文系の学問の自立性を確保しようとする試みは、それが「精神科学」としてであれ、「文化科学」としてであれ、いずれも一半の成功をおさめながらも、他の半面に於いては、弱点を露呈せざるを得ない。教養主義をめぐってそのノスタルジアを旧制高校のそれに寄せる人々も、最後の世代が現役を退いた現在、拂底しつつあるが、教養主義そのものは、「精神科学」という学問区分が登場してきたとき既に危機の局面にあり、次いで「文化科学」が出てきたときに、教養・陶冶・教育を支えてきたもう一つのエートスも消えることになるだろう。研究と教育の場としての大学には、多少なりとも教師としてのエートスが息づいていなければならないが、大学の構成員が、専ら研究者たることを要求されるようになったとき、学識者が身に帯していた「知識以外の何か」も次第に疎んぜられるようになる。それはどうしてか。

自然科学と拮抗する地位におかれた文化科学は、何よりもまず科学として、日常的に営まれる研究活動の一つであるという意義を附与される。ところで自然科学は、何人たりといえども承認せざるを得ない事実を、厳密に客観的に呈示する。文化科学も科学たる以上、これに対抗しうる客観性を呈示し得るものでなければならない……云々。これは、正常な反応である。だがこの正常な反応が、つぎの段階でとびついたものが、他でもない「没価値性の理論」であった。文化科学は、この理論の要請するところを楯にとり価値判断とは異なる事実認定、或いは事実確定の領域の開拓に邁進する。だが事態がこのように展開することは、提唱者の望んだことではなかった。ウェーバーの本来の意図は、価値への志向が旺盛なるときには、それを抑制することによって見えてくる事実があるということに注意をうながすことであった。事実の次元は、実践的意欲をひとたびは括弧にいれることによって確保されるべきものであった。にもかかわらず、ことは安易に流れて、研究関心の重点は、価値判断を不要とする領域へとなだれをうったように移動し始める。文献学的研究分野

が、急激に伸長するとともに、事実認定の為の資料探求、数理統計、実態調査といった実証的手段が大勢を支配するようになる。冒頭に述べた「方法の制覇」が確立される。……事態の推移は概ね、以上のようなものであった。ともあれ、このようにして「人文学Humanities」も亦、客観性を重視する科学の一員となり、「人文科学」に格上げされたが、この地位を獲得することとひきかえに、近世初頭以来の人文学の固有の使命である「教育」は、科学者のエートスとしての研究至上主義を前にして撤退を余儀なくされたのである。「教養」は「陶冶」であるという原則、陶冶は価値を志向する信念にもとづかなければならないという原則、これらも亦価値からの中立を謳う研究至上主義の前に色あせるとともに、価値への志向を忘却した研究は文字通りに没価値的なものに化して行かざるを得なかった。[1]

新制大学制度の発足から、四十年余を経た今日、ドイツ的ヒューマニズムのエートスは地をはらったが、十九世紀以来の「教授の自由」と、第一次大戦前に始まった「価値からの中立」の姿勢は、今なお依然としてその形骸をさらしている。

註　1．以上の記述は、人文学復権のための努力―たとえば解釈学に立脚して「精神科学」を建設しようとするH．G．ガダマーの企図など―については一切触れず、人文系の学問に対しては酷薄な論定に終始したが、今世紀に於けるフマニスムス回復の試みについては、別途、論ずるつもりである。

五．「内部志向型」から「他人志向型」へ

前節に於いて、「教養」の変質の過程を辿り、教養概念が次第に死滅に近づいてくる経緯を追尋してみたが、これまでの記述に関しては、事柄がドイツのうちにとどまり、教養概念といっても特殊な時代空間のなかでのそれにすぎないのではないかという批判があろう。この指摘は正当であり、たとえばイギリスの「紳士教育」やフランスのユマニスム、さらには「良識」の伝統といったものを支えてきた「教養の理念」も考察すべきであろう。しかし小論は、我国の高等教育観に根強く残存してきた「本場ドイツ」への憧憬と、この夢がはかなく消えたあと、悪しき習性となってなおも沈澱しているものを剔出しなければならないという考えから、書きすすめたものであり、十九世紀段階の事柄については、検討を以上にとどめて次の問題に移ろう。

さてこれまでの論述をふまえた場合、問われなければならないのは、以下の事柄である。

今日、教養教育の改善・改革を叫ぶ声は大きい。しかしながら、「教養」の再興を企図する人はいても、再構築の方向として、ドイツ的教養の復活、或いはせめてなりともこれに即して再建の方途を探ろうとする試みが全く見当たらないという事実がある。これはどうしたことであろうか。何がこのことの根底に潜んでいるのだろうか。こうした問いは、一見したところほとんど無意味であり、葬り去られたところで異議の挟みようがないと思われてきた種類のものである。しかし、この問いを従来なされてきたものとは別の文脈で検討してみると、まことに意想外の事実があらわれてくる。そしてこのことをふまえるならば、たとえ正面の方向ではなくとも、構築されるべき教養教育が、何に配慮すべきかということだけは、或る程度見えてくるのではないかと思われる。

「ドイツ的教養」の理念が、今日、誰の口端にも登らなくなったのは、ナチス・ドイツの忌わしき傷痕のせいだけではない。ナチズムの惨禍を経たあとでは、それ以前の無垢の日々がとりかえすすべもない往昔の日々と感じられて、遠い夢幻の別世界となってしまったからだけではない。そうではなく、十九世紀段階の人間類型と、二十世紀の、それも特に世紀後半の人間類型では、人間そのものが全く違う鋳型にいれられて形成されているということにある。「人格の尊厳」、「主体的人間」、「内面性の自由」といった言葉が遠いこだまのようにうつろなひびきしか残さないのは、我々はもはやこれらの言葉を発した人々が意識していた人間ではなく、又、こうした人々から構成される人間集団に帰属しているわけでもないからである。「内面性の自由」といい「良心にもとづいた行為」といい、あたかも人は、自己固有の内面の原理に即して行為することができるように云われ、この可能性を前提にし

た行為の原理を内に秘めた人間に成ることが教育の課題であるとされた時代は過ぎ去った。これはどういうことか。[1]

一九四〇年代の末に、D．リースマンは、明らかに新しい人間類型が、歴史の表舞台に登場し、時代の主流になりつつあることを見てとり、このこれまでには見られなかったタイプの人間を「他人指向型」の人間と名づけた。このタイプは、「外部の他者たちの期待と好みに敏感であり、このことによって同調性を保障されて」生きてゆく人間である。彼らの行為、行動指針を方向づけるのは、彼の身のまわりに出会う人々、つまり同時代人である。従ってこのようなタイプは、何よりも時代と周囲の動向に敏感であり、これにそうかたちで生きることが彼らのライフスタイルである……云々。[2] このとりたてて何の奇もない記述が何故、今、問題となるのか。誰しもこういぶかるかも知れない。だが、リースマンが、この新しいタイプにとってかわられつつある旧来のタイプを記述して以下のように云うとき、ここには看過することのできない重大な事実が潜んでいる。

「幼児期に目標のセットを内化する傾向によって形成された人は、自らのうちにジャイロスコープ（心的羅針盤）を内蔵し、自らが立てた目標に向って、このジャイロスコープを使用しながら突き進んで行く」と。このタイプに命名して、彼はこれを「内部指向型」の人間と呼ぶ。[3]

「幼児期に内化された人生目標」にしろ或いは「内蔵するジャイロスコープ」という比喩にしろ、なにかしらなつかしいイメージに結びつくものがある。セルフ・メイド・マン、世評を気にしない独立独歩の人、コツコツと創意工夫を重ねて人生を意義あるものにしようとする努力家……要するに、世間の荒波にもまれながらも、人生を安売りすることなく、奮闘の生涯であったことに満足して生を卒えようとする人間、そう、ここにイメージされているのは、建国以来の実直なアメリカ人のすがたなのだ、このアメリカ人たちが、今、新しいタイプの人間にとってかわられつつある。これに気づいたことが、リースマンの大著を書くきっかけであった。

ところで「内蔵するジャイロスコープ」とか、「内部指向型」とかの言葉がいみじくも語るように、こうした造語でその輪郭を伝えようとしたのは、実は「内面的に自立する個人」という人間類型であった。そしてこのタイプの人は、近代西欧が生み出した独特の人間類型であることを示そうとして彼は次のように云う。

「西洋史のなかで、ルネッサンスと宗教改革とともに出現し、かつ、今や消え去ろうとしている社会は、内部指向を同調性の主要原理とする社会の具体例である……[4]

「……内部指向の人間は自分自身の人生を自分で統御するのだという感覚をもち、又、彼の子どもたちに対してもそれぞれに人生を切り拓いてゆくものだという考え方でのぞむ。[5]

「プロテスタントの倫理　ーそれはマックス・ウェーバーが特徴づけたものであるが、ここでいう内部指向のひとつのあらわれである[6]

「ルネッサンスから、宗教改革に至る期間に生まれた性格を、我々は内部指向型と名づけるのであるが、ひとくちにルネッサンスから宗教改革に至る性格類型といってもそれには、幾つかの地域差がある。つまり、これまで述べてきたような過程は、ラテン系の諸国に於けるよりも北ヨーロッパのプロテスタントやジャンセニストの間でより強烈であったし、又、同じ北ヨーロッパでもルーテル派やアングリカンよりもカルヴァン派や敬虔派の方がより強烈であった。……[7]（下線部引用者）

上引の記述から察せられるように、「内部指向型」の人間とは、近代西欧の価値志向をビルト・インされ、それを新大陸に於いても身に体して生きた人間である。二十世紀を「アメリカの世紀」にするために努力し、最も功績のあったアメリカの中産階級の人々、それがリースマンの云う「内部指向型」の人々なのである。この人々は新大陸の開拓にたずさわり、プラグマティックにその仕事を推し進めた点に限ってみれば、いささかもドイツ流の観念論者に似通うところはなかった。にもかかわらず、内面的な心のかまえに於いては、なんと十九世紀ドイツの教養の理想に近いことか。両者とも自己の人生の目標を遠くにおいた。一方は、たとえばギリシャ的、ルネッサンス的人格理念に、他方は

理想の国土の建設やフロンティアの開拓に。この遠い目標に向って進むために自らのうちに確固たる心的羅針盤がすえられることを望んだ。この心理的特性を、リースマンはいみじくも「艱難に耐えて星に向かおうAd astra per aspera」[8]というカンザス州のモットーに要約しているが、ここには「苦難を通して歓喜へ」というベートーヴェンの第九交響曲（これこそはドイツ教養主義の主題曲である）や、たとえ通俗化しているとは云え、カントの「実践理性批判」の終章を飾る述懐に通ずるものを認めることができよう。このように見れば、大西洋を隔てた新旧両大陸の陶冶の理念は、実は意外な親近関係にあったと云いうるのであるが、しかし、この種の「理想に生きた人々」の時代は終り、今や第三のタイプ（第一のタイプは伝統指向型、第二が内部指向型である）の人間が抬頭しつつある。これが「孤独なる群衆」に於いてリースマンが訴えようとしたことであった。

「孤独なる群衆」に描かれている「他人指向型」の人間は、日本もそのうちに含まれる現代先進国の中産階級の人間である。我々も亦、この人々のうちに含まれる。彼ら、即ち我々は、「はるかかなたからの声、古き世代の声に耳をかたむけることはない」。[9] 我々にとって大切なのは、行為の指針を同時代人との同調性のうちにもつことである。しかも既に三十年以上も前に、「世界中のあらゆる国の学生たちは、外面的な特徴においてばかりか、その基本的な構造においても非常に似通うものを持つようになってきている。従ってこれらの学生達は、それぞれの文化の中での古い世代との共通点というよりは、むしろ異なった文化の中にいる同世代人とより多くの共通点を分ちあっている」[10]と指摘された傾向は、今や日米両国の若者にとっては、自明、既成の事実となっている。過去の偉大な人々が歩んだ人生、古典のうちに示されている人生の叡智、高貴な人生の規範、こうしたものが若者の行動の指針となることはない。「告知さるべき内面の豊かさ」は、貧相な外観とはそぐわない。修練のはてにみがかれた個性が、周囲との協調関係をそこなうようであれば、願いさげである……。第三のタイプの人々は、このように感じる。これは十九世紀ドイツの人格理念とはうらはらの関係にある人間の感性である。ともあれこのように見てくるならば、ドイツ教養主義の人格理念は、実はリースマンの謂う内部指向型のそれであることが、歴然としてこよう。彼らは、「ギリシャ的な合理性と、ユダヤ・キリスト教的な現世的道徳の結びつきから生まれたプロテスタントの倫理」[11]の土壌に生い育ち、「内なる思いを星に向けて」生きようとしていた点に於いては心性を共有していたのである。だが「富める社会」（ガルブレイス）が到来し、昔の王侯貴族の生活が一般の人々のものともなった時点において、この種の人々は姿を消してゆく。「かつての時代の上流階級は現代の他人指向的人間の先駆者」[12]であることをふまえ、この新しい人間類型の出現に対しては、文字通りに「価値的に中立」の立場から、この事実を認めなければならない。

以上の論定にしたがうならば、教育改善の方向は、現代の学生が第三の人間類型に属する人々なのか、或いはこれをも超え出た第四の人間類型ともいうべき新人類なのかを見定めることから着手しなければならないであろう。そしてこのような学生群を相手に講じられるテーマも又、大幅な変更を迫られるであろう。少なくともリースマンの著書があらわれる以前に既に導入されていた学科・学問区分は今や見直しの時を迎えていると云ってよい。このことを考えるにあたって、我々は「二十世紀科学」が登場する経緯、これらが布置されている状況を解明しなければならない。

註　1．以下、「内部指向型」の人間類型とドイツ教養主義との類似を指摘する観点は、前掲H．シェルスキー「大学の孤独と自由」の示唆によっている。特に同書87頁を参照。
2．D．リースマン「孤独な群衆」1950（加藤訳　みすず書房1964）７頁
3．７頁、13頁の要約
4．12頁
5．14頁
6．〃
7．35頁
8．103頁
9．25頁

10. XVI頁（1961年版序文）
11. 132頁
12. リースマンは他人指向型の人間向きの仕事がふえつつあることに対応して、「一般教養が重視され、又、専門学校や大学の科目の中に人文社会部門が導入され」ることになったとしている（123頁）。ここだけを読めば、既に四十年以上前に一般教育を導入した日本の大学は、時代の動向を先取りしていたのかも知れないが、結局うまくゆかなかったのは、受講者を旧制高校生と同格同質の人間と考え続けてきたことが一因となろう。

小結　―「近代世界システム」と学問区分―

人間類型がこのように大きく変化するなかで―そもそもどのような歴史過程が「他人指向型」の人間を生み出したのかということは、別個に問われなければならないことであるが―、学問研究のスタイルも、方法・目的も又、変ってゆく。だがこれは、実は相互媒介的なことであり、学問の性格の変更が人間の性格を変えてゆくという側面があることも云うまでもない。ともあれ、一世紀を隔てる間に全く様相が一変した文系の学問は、今どういう状況にあるのであろうか。今後の方向を見定めるためにも、このことを一瞥しておく必要があろう。

既に再三述べたように、「自然科学対精神科学・文化科学」といったかたちでの学問区分は、今日ほとんど意味をもたない。現在、一般に採用されている区分では、「自然科学・人文科学・社会科学」という三区分になっている。かつて精神科学、乃至は文化科学に一括されていたものは、人文科学と社会科学に二分されているわけである。しかし、これが意味をもちうるかどうかと云えば、はなはだ怪しいものと云わざるを得ない。伝統的に人文科学のうちに組み入れられている心理学は、現在では行動科学としてすっかり面目を一新し、あるものはほとんど自然科学と見紛うほどに変貌をとげ、又、あるものは社会科学的性格を濃厚にしている。十九世紀初頭、新人文主義を先導した言語学は、長足の進歩を遂げて二十世紀を迎え、ソシュール革命をひきおこしたばかりでなく、この四、五十年間にはさらに変転して、もはや“のどかな”人文主義者の研究対象とは思えないほどに成長した。さらに文学研究に於いても、一部は「地域研究」のスタイルを採り、かつて考えられなかったような新生地を開拓している。このように二十世紀の後半に至って、研究領域の隔壁は、あるものはとりはらわれて今や存在せず、或るものは対象はかわらずともアプローチの方法は全くかわるなど、著しい変質をきたし、現にさらなる変貌に向って突き進んでいる。この事態の帰趨は、今のところ誰にも予測がつかない。にもかかわらず、二十世紀科学の特色を探り、何がこのような事態をひきおこしているのかについては、やはり問わざるを得ない。

世紀の終末にあたって誰にでも気づかれる一つのことがある。それは、学問研究は今、グローバルなレベルで同時進行にあるということである。現代の科学研究を推し進める重大な契機の一つは、このグローバリズムにあるとも云えるであろう。ところでグローバリズム・グローバライゼーションは、いつ頃、何を契機に胎動し始めたかと云えば、世界が経済システムとして一元化したことに、少なくとも一つの原因を求めることができるであろう。所謂世界経済システムである。我々はこの「世界システム」のなかに、好むと好まざるとにかかわらずくみこまれている。我々が学問と云い、研究と称しているものもこのシステムの中での活動に他ならない。従って現在の学問が如何なるものであるかを知るためには、このシステムに関係づけてみた場合、学問研究がどのように配置されているかを検証することもその一方途となるであろう。これによって全てが明らかになるわけではないが、特質の少なくとも一面はとらえられよう。このことについて、近代世界システムの提唱者ウォーラースティンの所説をみておきたい。

「中世の大学の哲学の学部が、我々が今日知っている多くの学問分野に分化していったのは何故かを自問するのみならず、この分化がまさにその形態をとったのは何故かを自問するならば、その究極的な形態が、十九世紀の世界経済システムに支配的なイデオロギー、そのイギリス的変種である古典的自由

主義であることが理解できる。最初の前提は、近代世界の偉大な業績とは、人間活動が三つの領域に適切に分割されたと云うことであった。つまり権力行使という公共的領域、生産という半公共的領域、日常生活という私的領域の三つにである。こうした諸領域を混同するのは中世的であった。それを分割することは崇高な仕事だった。そこから現代の認識論のまさに基礎をなす三つの知識の分割、つまり政治的、経済的、社会－文化的諸専門領域が生まれた。あるいは又、現代の大学学部と専門団体の観点から云えば、政治学、経済学、社会学が生まれたのである。」[1]

このことに関連して、さらに次のような指摘もみられる。

「今日知られているような歴史と社会科学は、大半が十九世紀思想の産物である。たしかに歴史記述にはそれよりもはるかに長い歴史があるし、社会科学はそれ以前にはたいていは哲学の名のもとに多くの専門家予備軍を有してきた。しかしながらフランス革命は世界システムに制度的なショックを与えた。その結果全体的な文化的変化が、連続的に生じた。一つは専門的な活動としての社会科学の登場であった。特に境界がかなり曖昧な知的論争の単一の分野だったものが、まず1848年と1914年との間に、ひとつひとつに新造語の名称をもつ、一連のいわゆるディシプリンがしばしば新教説neologismと呼ばれるものに分化した。それらの主たる名称としては、歴史学、地理学、経済学、社会学、政治学、人類学、そして東洋学 Orientalismがあった。」[2]

上引の叙述から知られることは、十九世紀ドイツの学問が、精神科学、或いは文化科学として体裁をととのえようとしていた頃、あたかも時を同じくして、はるかに巨大な動きが開始されつつあったということである。この動きは、今世紀に突入してくっきりとした相貌を呈するようになったが、今にして思えば、前世紀末期のドイツに於けるさまざまな学問論も、この未だ形をなさぬ、不透明な胎動を前にしてそれぞれの立場でおぼえた危機意識と、プロテスタントの誇りをこめた「先駆的決意」から生まれた反応の一つのあらわれであったと理解することもできよう。ともあれ、十九世紀ドイツという「学問の府」をも一局地に化するとともに、その精華を拉し去ったこの巨大な潮流は、大西洋の西岸に打ち寄せて、二十世紀アメリカ科学を現出させるのである。

さてウォーラースティンによれば、現今の社会科学は、十九世紀中葉以降、着々とかたちをととのえつつあった世界経済システムの所産であり、このシステムに合致する方向で形成が急がれたものであるということになろう。彼の所説を要約すれば、国家的公共的レベルでの活動に対応して政治学、私人の営利活動でありながら、国家大の規模にまで影響の範囲を広げた産業資本の半公共的な生産活動に対応する経済学、公と私の交錯する日常の社会的文化的事象を扱う社会学が、まず欧米先進国のシステムにそうかたちで構築される。次いで欧米列強の帝国主義的覇権活動の過程で、地球上の発展途上国にかかわるものがオリエンタリズム、即ち東洋学として、さらには無文字社会へのアプローチが文化人類学としてこれらにつけ加えられることになる。

ところでこのシステムの中で、歴史学はどのように位置づけられることになったかと云えば、政治史、外交史、法制史、経済史、社会史、等々、それぞれに対応する領域毎の社会科学の一分野としてとりこまれて歴史科学となり、さらには歴史社会学といったかたちで新生面をひろげてゆく。このようにしてかつてのドイツに於いてかまびすしくその帰属を論じられたところの精神・文化諸科学の中の多くは、「近代世界システム」の完結に向けて再配置されることになるが、これは単に、歴史学だけのことではない。たとえば、このシステムのうちに生活する人間の行動形態、社会意識をとらえるのに有効な行動主義の手法は、最初心理学の革新に始まり、次第に他の関連領域、近隣分野をもまきこんでゆき、社会心理学をはじめとする、当初は学際領域と思われていたが、やがて一個独立のディシプリンとして存立する新たな科学を生み出してゆく。個人レベルでのこととされていた文学研究、或いは言語研究が今日くりひろげている多彩な研究テーマについては云うまでもない。このようにして学問分野の相貌はほとんど一変したが、これは本節冒頭に述べた言葉で云えば、グローバリズムとかかわってさらに急速に進行してゆくであろう。

このように十九世紀から二十世紀に至る百年間の学問区分の推移をみてみると、学問研究が如何に激しい変貌を重ねながら、今日に至っているか、或る程度、理解されよう。これに連動して教養概念も変質につぐ変質を重ねた。かつての学問 Wissenschaft は科学 scienceに、学者は研究者にかわった。そして学者がかねていた教育者は、それでは何に変わり、誰になるのだろうか……？ともあれ、学問がこれだけの変容を遂げた現在、一九四五年段階の区分のままに、人文科学・社会科学・自然科学の三区分にこだわることにはあまり意味がないであろう。しかもさらに、その頃新しい人間として描かれた「他人指向型」にしたところで、これを旧「人間」に分類してしまうような時代がもうすぐそこに迫っているかも知れない。我々はこうした事実認識をふまえて改善の方向を定めなければならない局面に立ち到っている。

註　1．Ｉ．ウォーラースティン「脱＝社会科学」1991（本田他訳　藤原書店　1993年）第六章　ミュルダールの遺産、136頁

2．同頁